

保育園における「気になる子」の行動及び保育士の対応についての臨床心理学的考察—アタッチメント理論の視点より—

早坂 佳恵

<研究の背景と目的>

近年こどもを取り巻く問題として発達障がいと子ども虐待に注目が集まっており、子どもとその養育者に最も近い専門機関・専門職として保育所・保育士が対応の要として期待されている。被虐待児は愛着の問題を有しやすく、発達障がいと被虐待児の言動の特徴には一致する部分が多いことが従来より指摘されており、発達障がいの存在が虐待発生リスク要因であり、被虐待児と発達障がい児は状態像に類似点が多いため問題行動の原因鑑別は困難とされている。保育士は発達障がいの疑いのある子ども、被虐待体験に起因して様々な問題行動をとる子どもらを「気になる子」と察知しており、対応に苦慮していることが報告されている。

本研究では「気になる子」について、特に関係性の問題に焦点を当て、保育士の子どもへの認知及び保育士・保育所の対処法略を収集・分析し、臨床心理学的考察を行い心理職の介入の有用性と可能性を探ることを目的とする。

<方法>

札幌市及び近郊の保育所4箇所所属する保育士8名に対し半構造化インタビューを実施し、保育士が「気になる子」についての保育士の認知及び保育士と保育所が当該の子どもとその養育者に対してどのような保育や援助活動を実践しているか等を伺った。語られた子どもの総数は16名であった。収集したインタビューは逐語録に変換し、以下の分析を行った。

- ①子どもの「気になる」エピソードを逐語録より抽出しKJ法にて分類、統合されたエピソード数を元に子どもらを分類した
- ②子どもに対する見立て・行動原因の解釈、保育所や保育士としての子どもと養育者への対応に関する記述等を抽出した後、①の分類ごとに集

約した

- ③逐語録を研究協力者ごとに分割しテキストマイニングを実施し、研究協力者を逐語録の内容をもとに分類した

<結果>

分析①・②：語られたエピソード299項目（一部重複）を対象としたKJ法により、子どもの「気になる」エピソードは3群：「衝動性の高さ」「認知の弱さ・異質さ」「対人関係に関する問題」に分類した。集約されたエピソードが最も多かったのは「衝動性の高さ」(190項目)、次いで「対人関係に関する問題」(100項目)「認知の弱さ・異質さ」(79項目)であった。この3群を検討した結果、「衝動性の高さ」は発達障がい・愛着の問題双方から、「認知の弱さ・異質さ」は発達障がいから、「対人関係に関する問題」は愛着の問題から起因している可能性が示された。さらにKJ法結果を元にクラスタ分析を実施した結果、子ども16人は4群に分割された。保育士の対処法略と照合した結果発達障がいと愛着の問題の兆候を併発させている子どもが8人存在し、状態像によって保育士の対処法略に差異があることが示された。

分析③：頻出語50語の出現数を元にクラスタ分析を行った結果、保育所ごとの分類がなされ、保育士の語りの内容が所属保育所によって影響を受けている可能性が示された。

<考察>

保育現場の「気になる子」の中には発達障がいだけではなく愛着の問題、環境要因による関係性の障害の兆候を示す子が存在しており、保育士は発達障がいの徴候とともに「気になる」ととらえているが、子ども別に適切な対応がとられていない可能性が示された。さらに気になる子の記述について、保育所ごとに独特の表現が用いられている可能性が示された。これらより心理職の臨床心理学的視点から関係性にも着目した対処方略の提供の必要性、介入時の保育現場独特の言語や背景理解の重要性が示唆された。